

# 万葉集の「中皇命」

## — その人と作品 —

### 第一部

## 福 沢 武 一

最初に関係歌を一括して掲げます。第一部は「その人」を中心に、第二部は第10歌と第484歌の訓釈に限って、検討を加えることにします。

### 高市岡本宮御宇天皇代（巻1）

天皇遊蕩内野之時中皇命使間人連老猷歌  
やすみしし我が大君の 朝には執り撫で給ひ  
夕にはい寄り立たしし み執らしの梓の弓の  
奈加弭の音すなり  
朝獵に今立たすらし 夕獵に今立たすらし  
み執らしの梓の弓の 奈加弭の音すなり  
(3歌)

### 反歌

たまきはる宇智の大野に馬なめて朝踏ますら  
むその草深野（4歌）

### 後岡本宮御宇天皇代

#### 中皇命往于紀温泉之時御歌

君が代も吾が代も所知哉磐代の岡の草根をい  
ざ結びてな（10歌）  
吾が背子は仮廬造らす草なくは小松が下の草  
を刈らさね（11歌）  
吾が欲りし野鳥は見せつ底深き阿胡根の浦の  
珠そ給はぬ 或頭云、吾が欲りし子鳥は見し  
を（12歌）

右檢山上憶良大夫類聚歌林曰、天皇御製  
歌云々

### 相聞（巻4）

#### 難波天皇妹奉上在山趾皇兄御歌一首

一日こそ人も待ちよき長きけをかく待たゆれば  
ありかつましじ（484歌）

#### 岡本天皇御製一首并短歌

神代より生れ継ぎくれば 人さには国には満  
ちて あぢむらの通ひは行けど 吾が恋ふる

君にしあらねば 昼は日の暮るるまで 夜は  
夜の明るるきはみ 念ひつついも寝かてにと  
明しつらくも 長きこの夜を（485歌）

### 反歌

山の端にあぢむら騒き行くなれど吾はさぶし  
ゑ君にしあらねば（486歌）  
淡海路のとこの山なるいさや川けのころころ  
は恋ひつつもあらむ（487歌）

右今案、高市岡本宮後岡本宮二代二帝各  
有異焉。但称岡本天皇未審其指。

中皇命の全作品を沢瀉氏は齊明天皇に帰属させ  
ました。

明瞭に天皇の御作と認むべきものがなく、  
中には一首もないと見る学者すらあった。し  
かし、私は万葉の劈頭において最も花々しい  
作歌を残されたのがこの天皇でないかと考へ  
る。……万葉歌人の誕生とは、齊明天皇には  
じまる母子二帝の作歌活動をさすべきではな  
いか、と私は考へる。（万葉歌人の誕生）

このような見解に導火線となったのは喜田貞吉  
氏の「中皇命考」でした。

従来、3・4歌、10—12歌の「中皇命」は間人  
皇女、後の間人皇后が擬せられていました。「中  
皇女」の誤記で、中大兄・大海人二皇子の真中の  
姉妹の意に「中」を当てたとみたのです。

喜田氏は3・4歌に齊明天皇、10—12歌に天  
智帝皇后倭姫その人をあてました。

「皇命」は天皇、「中」は中間・中継・暫定と  
解したのです。沢瀉氏はここに論拠を置き、さら  
に左注を大幅に採用し、3・4歌、10歌群はもち  
ろん、7・8歌も齊明天皇作とし、17・18歌は天  
智天皇に推定したのです。

ここには「中皇命」関係歌に限り同解者・同調

者の名簿を作ってみます。①

### 3・4歌

齊明自作 喜田氏（論纂）・土屋氏（私見・短歌文学講座）・沢瀉氏（講話・万葉の窓・誕生・注釈）・佐々木氏（評釈・事典）・徳光氏白鳳文学・田辺氏（初期万葉・至文堂文学史・和歌文学大辞典）・五味氏岩波講座日本文学②）・窪田氏秀歌・山崎氏（争点）・桜井氏万葉人の憧憬。

齊明代作 折口氏（口訳・改造社短歌講座）  
・武田氏（新訳・全注釈）・津雲氏大観・森本氏（精粹・精神と釈義）・山本氏（文芸読本・詩の自覚の歴史）・都筑氏万葉集十三人・三省堂古典学習シリーズ本・松田氏作者と作品。

### 10—12歌

倭姫作 喜田・折口・武田各氏の前掲書、屋敷頼雄氏（アララギ昭和3年6月）・朝日全書・今井氏（三笠版短歌文学講座）・石井氏（創元社葉集講座）、都筑・松田両氏前掲書。

齊明作 土屋・沢瀉・田辺各氏の前掲書、折口氏世界抒情詩選・佐伯氏評解・皇室歌人・事典・吉永氏（和歌文学大辞典）・石母田氏（大成⑤）・山本氏文芸読本・清水氏序説・山崎氏（争点）。

3・4歌の「中皇命」はすでに齊明天皇になっています。10歌群もその方向に傾いています。それに対し、在来の間人皇女説にとどまる向きもないではありません。窪田氏評釈・土屋氏私注など。特に私注の論は詳細です。それは顧みられなさすぎます。そう思っている矢先、谷馨氏が次のように述べました。

私見によれば、中皇命は間人皇女である。

これについては、拙稿「中皇命作歌攷」②に「私注」の説に賛し、且詳説して置いた。

（額田王95頁注）

私注は全く顧みられなかったのではありませんでした。

一方、間人皇女と中大兄との、兄妹のラチを越えた関係を吉永氏が指摘しました。③この先蹤がちゃんとあります。安藤野雁です。その一文を引用します。

歌を間人皇后に送りて曰く、

かなきつけ我が飼ふ駒は引出せず我が飼  
ふ駒を人見つらむか（孝徳紀）

此御製の意いまだ解得たる説なければ因に云べし。……ヒキデセスは馬を牽出すことをせずにして、皇后を堅固く守護りたまふよしの譬喩なり。さて此の句より次句につづけて心得べし。上の句アガカフコマハよりつづけて心得べからず。よくせずは誤なるべし。さてはカナキつけアガカフコマとつづき、まだ牽出すことをせずアガカフコマとつづきて一對の章なればなり。此のヒトミツランカは男女の婚ふことを見と云り。見し人、見そめはじめなど中古の物に多かるは古言なるべし。此も天皇の堅固く守護りたまへる皇后の率て往れて、別人にも婚ひたまはむかとあやぶみませるころの大御歌ぞかし。（新考484歌注）

これは徹底してい、まことに勇ましい説です。しかし、それでいいのでなかったでしょうか？以下にころみる考察も別な結論を導いてはこないのです。

## 二

「中皇女」の誤記は認めかねます。3・4歌と10歌群との二箇所「中皇命」と明示されているのですから。間人皇女を「中皇女」と誌した文献もありません。「中皇命」の語義は喜田氏の考証に従うべきです。それがだれを指しているかが問題になります。

智蔵は、俗姓禾田氏。淡海帝の世、唐国に遣学す。時に呉越の間に高学の尼あり。法師、尼に就いて業を受け、6、7年間にして学業顕秀す。……太后天皇の世、師、本朝に向ふ。……論難蜂起するに應對流る如く、皆屈服して恐駭せざるなし。帝これを嘉し、僧正に拜す。時に73。（懐風藻）

智蔵が僧正に補せられたのは天武2年です。その帰朝は天智天皇崩御直後でした。

673年10月、天智天皇は死の床に皇弟を召し、天位を譲ろうとしました。皇弟は、

疾と称して固辞みまうして受けずして曰はく、「請ふ、洪業を挙げて大后に付属けまつり、大友王をして諸の政を宣はしめ奉らむ。

臣請願ふ、天皇の奉<sup>み</sup>為に出家して修<sup>をこな</sup>道はむ。」  
天皇許し給ふ。(天智紀10年)

同年12月2日、崩御。この直後、倭姫が太后天皇であったことが認められます。智蔵の帰朝はまさにこの時期に当たっていたのです。

天皇(斉明)、筑紫朝倉宮に行車し、まさに崩じたまはんとする時、いたく痛み憂ひ勅りたまはく、「此寺を誰にか授けて参れると先帝の待ち問ひたまはば、いかが答へ申さん」と憂ひ給ひき。時に近江宮御宇天皇奏したまはく、「開(天智)、髻に墨刺し、肩に鉾を負ひ、腰に斧を刺<sup>はさ</sup>みて為し奉らん」と奏しき。仲天皇、奏したまはく、「妾もわが妹と、炊女として造り奉らん」と奏しき。時に手を拍ち慶び給ひて、崩じたまひき。(大安寺伽藍縁起流記資財帳)

この仲天皇を喜田氏はさきの太后倭姫に擬しました。しかし、斉明天皇崩御時に、姫が枕頭に侍し、中大兄を前に「妾もわが妹」といえる関係にあったのでしょうか? 当時の倭姫を伺わせる資料は皆無なのです。まして、その3年前の紀温泉行幸時までさかのぼって、中大兄を「わが背子」(11歌)と呼びうる倭姫だったでしょうか?……斉明・中大兄・間人皇女のただならぬつながりの前に、可能性はゼロに等しいはずです。

古人大兄皇子の女倭姫王を立てて皇后と為したまふ。(天智紀7年)

倭姫について知られるのは、右を最初とし、天智天皇崩御時の万葉の挽歌長短4首にすぎません。

万葉の「中皇命」は舒明・斉明両期にわたっています。喜田氏は後期に倭姫を、前期に斉明天皇その人を当てました。二人以上の「中皇命」を認めるとすれば、舒明期・斉明期におけるそれぞれの「中皇命」を意味しなければなりません。それぞれの期における「天皇」の意味するところが異なるように。考えていただきたい。舒明期の場合、時の皇后で、後の斉明天皇を、ことさら「中皇命」と表記する必要があったのでしょうか? ただ「皇后」とすれば万事はかたついたはずです。

喜田説を継承し、別の角度から論を進めたのは沢瀉氏でした。

3・4歌の場合、中皇命は舒明崩後に記されたと思はれる。しかし舒明御在位の時には他に中皇命と申すべき方なく、当時としてさすところが明瞭であったので、その崩後の記録をそのままに採ったと考へることが出来る……。 (誕生)

後の称呼を前に及ぼす事はある。(同書)

それにしても、舒明在位中はその皇后、斉明期には天皇その人を、ことさら「中皇命」のままにして置くことの理解に苦しみます。たとえば、斉明期の「中大兄」(13歌群)が、近江期には「天皇」(16・20歌)と誌され、近江期には「皇太子」(21歌)だった大海人は、天武期には「天皇」(25・27歌)と明示されています。10歌群の題詞に「中皇命」とあって、左注には「天皇御製歌」云々とあることもうべなえせん。「中皇命」と「天皇」が別人だったからこそ左注が加えられたのでなかったのでしょうか?

### 三

従来「中皇命」に擬せられていた間人皇女にスポットライトを当ててみます。

- 1 后(後の斉明)、二男一女を生みませり。一を葛城皇子(天智)と曰す。二を間人皇女と曰ふ。三を大海人皇子(天武)と曰す。

(舒明紀2年春正月)

- 2 息長足日広額天皇(舒明)の女間人皇女を立てて皇后と為たまひ……。 (孝徳紀大化元年)

- 3 太子(中大兄)奏請して曰く、冀くは倭の京に遷らむと欲す。天皇(孝徳)許したまはず。皇太子、すなはち皇祖母尊(斉明)・間人皇后を率奉り、併せて皇弟等を率べて、往きて倭の飛鳥河辺宮にまします。時に百官の人等皆随ひて遷る。是に由りて天皇恨みて国位を去り給はむと欲りて、宮を山碕に造らしめ給ふ。すなわち歌を間人皇后に送りて曰く、  
鉗<sup>かなき</sup>着け我が飼ふ駒は引き出せず

我が飼ふ駒は人見つらむか(孝徳紀4年)

- 4 冬10月癸卯朔、皇太子、天皇疾病したまふと聞きて、すなはち皇祖母尊・間人皇后を奉り、併せて皇弟・公卿を率て難波宮に赴きたまふ。壬子、天皇正寝に崩りましぬ。(孝徳紀白雉5年)

5 7月甲午朔丁巳、天皇朝倉宮に崩りましぬ。(斉明紀7年)

皇太子、素服たてまつりて称制す。(天智即位前紀)

6 2月癸酉朔丁酉、間人大后薨ましぬ。

3月癸卯朔戊午、間人大后の為に380人を度せしむ。(天智紀4年)

7 2月壬辰朔戊午、天豊財重日足姫天皇(斉明)と間人皇女とを、小市岡上陵に合せ葬めたてまつる。(天智6年)

8 正月……皇太子、<sup>あまつひつぎ</sup>天皇位しろしめす。(或本に云ふ、6年歳次丁卯の3月、位に即きたまふ。)

2月……古人大兄皇子の女倭姫王を立てて皇后と為たまふ。(天智紀7年)

ここには驚くべきことがひそんでいます。中大兄が皇太后・皇后を誘って、孝徳天皇一人を難波宮に置き去りにしたことです。実権は完全に中大兄に移っています。皇后はだれの皇后かといいたくなるほどです。孝徳天皇が悶死するのは当然です。

不思議なことがまだあります。斉明天皇崩御後、満6年間、中大兄が即位を見合わせたことです。間人大后が薨じ、手厚く葬って、さて初めて即位し、倭姫を皇后に立てました。空位の時代、それは完全な空白だったとは思われません。暫定的に帝位にあるべき人は、間人大后をおいてないのです。それを思う時、大安寺の資財帳に、「妾もわが妹と、炊女として造り奉らん」と奏した仲天皇は間人皇女その人でなければなりません。こともあろうに孝徳天皇を見捨て、難波を立ちのいたのは、水入らずの、この母子3人だったのです。陵墓まで共にし、共にさせた3人なればこそ、「時に手を拍ち、慶びたまひて、崩じたまひき」が実感として生き返って来ます。

ここに河内野中寺藏弥勒菩薩の銘を引き合いに出すべきです。その全文を掲げます。

丙寅年4月大旧8日癸卯開記

橘寺知識等詣、中宮天皇大御身<sup>いたつきませし</sup>勞坐之時、誓願之奉れる弥勒御像也。友等人数千百十八、是位六道四生人等、此教可相也。(小学館図説文化史大系本による)

「丙寅年」は天智5年。「開」は天智天皇。こ

この「中宮天皇」について喜田氏に説があります。

日本紀所収天皇の詔の中に、皇太后天皇とある斉明天皇の御事なるべし。大宝令によるに、中宮とは三後の称にて、皇太后天皇が同時に中宮天皇と呼ばれるべきは論なし。(前掲書)

然りとすれば、数年前、橘寺の知識らがわざわざ筑紫朝倉宮へ参向したことを天智5年に追記したこととなりましょうか。しかし天智5年は、間人大后が前年に崩御され、その記憶もま新しいのです。いいたい、——間人大后こそ「中宮天皇」その人でなければならない、と。天智天皇崇福寺願文(本朝文集第2)にも間人皇后が中宮天皇と明示されています。これまた有力な資料です。中宮太皇后あればこそ中大兄は即位を満6年ひかえたこと、これはもはや疑うべからざるものに思われます。

#### 四

以上で知りました。間人大后は、時に中天皇、時に中宮天皇とよばれていたことを。喜田氏が述べられる通り、「中天皇」は中宮天皇か、中間天皇の意か、はっきりしません。いずれにせよ、次の点は明白です。万葉の中皇命は間人皇女、後の間人皇后その人だったのです。

10歌群の紀温泉行は斉明4年でした。その時、中大兄は現地へ同道しました。「中皇命」には異論を見ながらも、「君」(10歌)・「わが背子」(11歌)は断然中大兄が有力候補に挙げられてきました。「中皇命」を間人皇女とする立場からも中大兄が考えられていました。それでよかったのです。④

同様に、3・4歌の中皇命も間人皇女その人へ引きもどしていいのです。

父帝のところへ皇女が贈歌しました。間人連老に代作させたこと、——これまた偶然ではありません。当時、皇女は10歳をわずかに越えたところでした。まだ3・4歌をなすところには至っていません。狐場を踏んだ体験なしに、この生動に満ちた作品は生まれません。⑤

この事情を、いささか物語めいた次の一文に語ってもらいます。

童女が父天皇に歌を奉りたいから作ってくれと爺にせがむ。それは、父の、あの梓弓が

いまころ、どんなに活動しているかしら、というだけの単純な関心である。爺、すなわち間人老は子供の希望を、大人の文言に仕立てあげる。畏ってそれをやった結果は、御覽のとおり、翻訳でもしたような、間のぬけた歌が出来あがった。

「これで宜しうございますか？」

「うん。」

「では、爺が、これに反歌というものを付けて、奉りましょう。」

「うん。」

——だから、反歌だけが秀歌になってしまった。(神田秀夫氏万葉の世界)

批判は別稿に任せますが、皇女と間人老の間柄はこのようだったかと思われま。

齊明天皇は蘇我入鹿が斬りつけられた時、中大兄のために大極殿を血ぬられた、けがされた、舒明天皇にも申訳けないことになってしまった、もう中大兄には帝位は譲れないと考え、帝位は間人皇女に譲ったつもりであったろう。そうと皇極(齊明)天皇の考えを仮定すれば、世間は知らず、すくなくともこの宮中においては間人皇女こそ「中皇命」であり、孝徳天皇は単にその配偶者に過ぎないと思われていたろう。さて、世間では、孝徳崩後、皇極天皇が重祚して齊明天皇は、自分ももう一旦、位を退いた「皇祖母尊」に過ぎず、「中皇命」は依然として間人皇女であると決めていたろう。(同書)同氏初期万葉の女王たち、同考。

これは齊明天皇の心意に立った臆測です。むしろ「世間」の立場で考えたい。看板にもせよ、孝徳・齊明両帝が皇位にある限り、重ねて「中皇命」を考える必要はありません。齊明崩後の一時期に間人皇后がそれでした。その薨去によって天智の即位が成立したことを認めていいのです。⑥

ここで田中卓氏の説にもふれておきます。氏は二つの「中皇命」を間人皇后とし、10歌時には、有馬皇子に同伴して紀温泉へ下ったと推定します。この見解のヒントが早い時代に次のように提唱されています。

今二首の歌(10・11歌)、有馬皇子の妻の歌とみれば歌の詞の疑なし。しからば君之齒母と

よみ給へるは有馬皇子を指て歌の意も明也。

(春満辭案抄)

田中氏に一矢をむくいたのは尾上氏です。一文を抜記し、蛇足をつつしみます。

此頃、有馬の歌二首(141・142歌)と中ツ皇命の初めの歌二首(10・11歌)を掛合の如く組合はせて物を云う説が見え出した。今迄永い間誰も一笑にも附さなかった春満説を、改めて引張り出すのは洵に難儀である。有馬は19歳、中ツ皇命は40歳前後、而も前者は生命の瀬戸際の歌、後者は諧謔が飛出す程ののんびりした調子の歌、これを仮にでも一緒にして見ようとする程歌が解らないではどうにも手がつけれない。(大成(9))

## 五

484歌の「難波天皇」には仁徳天皇が擬せられています。それが古今の通説です。485歌の「岳本天皇」は、舒明・皇極・齊明の3代の間にぶれています。

難波に都をしめ給ひしは、この後、孝徳天皇もおはしませど、岳本天皇の前に載奉れば、ここは仁徳帝なる事明らけし。(攷証)この通説に異論を唱えた最初は安藤野雁です。

難波天皇は孝徳天皇なり。妹は兄弟姉妹の妹に非ず。夫に対へて妻を妹と云ふ、その妹にて、古き書体なり。然れば、此は孝徳天皇の皇后間人皇女にて、在山跡皇兄とは御同母兄の中大兄命なり。(新考)

つづいて折口氏が一説を立てました。いま484・485歌の題詞を氏の口訳万葉集から引用します。

孝徳天皇の皇妹、難波長柄ノ宮から、大和に居られる兄天皇に奉られた御歌。(484歌)

皇極天皇の御歌並びに短歌二首。(485—7歌)

孝徳が皇極に先立っています。その点について武田氏に次の説があります。

この巻頭数首は、多分同一資料に出たものとおぼしく、時代のほぼ一致する孝徳天皇と解するを妥当とする。但し万葉集の編者は、仁徳天皇の御事と解して、岳本天皇の御製よりも前に置いたのであらう。(全注釈)⑦では、「妹」は具体的にはだれでしょうか？孝徳天皇に妹君があったように見えません。同

天皇が大和へ行幸になった形跡もありません。

要するにこの題詞には疑問があり、編者自身にもくはしい事はわからなかったものと思はれるが、私注にあるやうに、編者は卷二の巻頭の作に類する伝誦歌として取扱はれたものと考へる。(沢瀉氏注釈)

孝徳説はつまずきました。この時、神田氏の勇敢な発言がありました。それは野雁・吉永氏の説を祖述するものです。長文にわたる引用を敢えてします。⑧

「難波天皇」はもちろん孝徳天皇であり、「妹」は間人皇女、「皇兄」は中大兄である。「妹」はほんとは「后」と書くべきところだが、下に「皇兄」と書くつもりでいるものだから、「天皇」の「皇」の下に「妹」と書いてしまったものと思う。これは、白雉5年(654)、孝徳天皇が崩御になる、ほんの10日か半月まえの頃であろう。前年(653)、天皇は、自分が許さないとやっているものを、中大兄がそれを無視して倭京へ遷都を強行し、間人皇后まで伴れ去ったことを恨んで、恐らくそれがもとであろうと思うが、病気になる。(初期万葉の女王たち)

「妹」を「后」の誤記とするところに疑問がこります。

妹といひ、兄といふのは、如何なる関係でもいふので、男女関係でも、この語を使ふのであるから、或はやはり、皇后、もしくは、後宮の婦人ではないかと思はれる。(武田氏皇室歌人)

この線でいけば、「妹」のまま間人皇后が意味されます。なお不安がのこるけれど、そのまま神田説の引用を読けます。

翌年(654)10月朔日、皇太子は上皇・皇后・皇弟らを引きつれて、難波の宮に天皇を見舞った。天皇は10日に崩じた、と孝徳紀にはある。だが、その少し前に、一足先にでも皇后間人皇女だけで難波に往っていて、やがて、天皇の危篤状態におちいったことを知り、倭京の皇太子(中大兄)に急報したので、それでみんなぞろぞろやってきた、というぐらゐの経緯は、孝徳紀に書いてなくとも認めて差しつかえあるまい。その至急便が即

ち此の歌で、「1日や2日であれば病人も持つかもしれませんが、もう長いこと寝たきりなので、こう待たされては、いつまで寿命が持ちこたえるとも思われません……。」

(前掲書)

まだまだ面白い臆測が続きますが、もう切り上げます。「皇兄」は中大兄。兄を恋いこがれる間人皇后の一歌と理解します。そうした2人の仲は10歌群に明かにされています。所詠時を孝徳天皇崩御直前に限ることもありません。

間人皇后は皇弟・公卿と共に難波宮に残り座すよしありて皇兄の中大兄太子に後れたまへる故に此御歌をば倭に奉り給へるなるべし。(野雁新考)

そうも考えません。二人はいつも行を共にしていたのですから。ここで中大兄には別な思い人のあったことを思い合わせてほしいと思います。

天皇、鏡王女に賜へる御歌一首

妹が家も継ぎて見ましを大和なる大島の嶺に家もあらましを(91 天智天皇)

鏡王女、和へ奉れる御歌一首

秋山の木の下隠りゆく水の吾こそまさめ思はずよりは(92)

鏡王女の歌一首

神奈備の岩瀬の森のほととぎすいたくな鳴きそ吾が恋まさる(1419)

ここへも時には出向いたはずです。そんな折を一歌に考えたい。一歌の「妹」は、「皇兄」に対して、「孝徳天皇に身を寄せているところの妹」(間人皇女)の意でなかったでしょうか?

## 六

485歌の題詞「岡天本皇」は説がわかれています。舒明説 代匠記・野雁新考・全釈・総釈 石井氏説・金子氏評釈・佐々木氏評釈・窪田氏評釈

皇極説 折口氏口訳

齊明説 童蒙抄・古義・井上氏新考・武田氏(皇室歌人・全注釈)・川田氏女流歌人・沢瀉氏(作品と時代・誕生・注釈)・田辺氏初期万葉・私注・全書・森脇氏解釈と鑑賞 舒明説の難点を窪田氏が三つ挙げました。

- 1 この作品は女性の立場で歌われている。
- 2 舒明の第2歌の明るさにくらべ、全く異趣

である。

3 この歌は民謡性が濃厚である。

それにも拘らず此の歌を採録したのは、此の巻を重からしめる為に、巻1第2歌に准じて、岳本天皇御製歌といふ伝のあるままに、第二首目に採録したのではないかと思はれる。(窪田氏評釈)

斉明説の方にも弱点がないではありません。作中の「君」に舒明天皇が当てられます。それは題詞の「岡本天皇」に抵触します。夫帝崩後の作だとの意見も出されました。しかし、この作品から哀悼に類する情が認められるでしょうか？

舒明天皇の皇后だった時代の作品に「岡本天皇御製」と表記するはずがありません。それは先程一言しました。斉明天皇在位中の作品とすべきです。その時、「君」は「中大兄」です。

斉明天皇がこの世で——すくなくともその在位中に、一番頼みたのは中大兄だったはずで。

所詠時を一応以上のように考定しました。天皇は岡本宮にあったでしょう。その時、中大兄はどこにいたのでしょうか？

487歌に突如として「近江路」が歌われてきます。地名が細述されています。  
狗上の鳥籠いぬかごの山なる不知也河いさとをきこせ  
吾が名のらすな (2710)

同じ地名だけれど、この方は単なる序詞です。斉明歌は、——ただ単に語呂あわせに終わっていいようとは思われません。そのとき中大兄が近江へ出向いていないとは限りません。

斉明紀を通覧するに、中大兄の近江行は記されていません。

3月の戊寅の朔に、天皇吉野に幸して肆宴す。庚辰(3日)に、天皇近江の平浦に幸す。(斉明紀5年)

この時は中大兄も随行したはずで。その前後に中大兄単独の近江行が考えられます。しかりとすれば、その折りに主題歌は歌われたに相違なく、484歌「難波天皇妹……」の後をうけて、「岡本天皇」の名で配列したことが極めて自然に思われます。

も一つの推定をこころみたい。

山上憶良大夫の類聚歌林に検するに、曰く、「一書に、戊申の年、比良宮に幸すとき

の大御歌そ」といふ。(7歌左注)

戊申の年は孝徳天皇の大化4年。紀はこの行幸を載せていません。皇太后皇極行幸の可能性あります。然りとすれば、近江路は主題歌の作者にとって、単なる歌枕ではなかったことが知られます。

いずれにせよ、巻4の巻頭数歌は斉明・中大兄・間人皇女のただならぬ仲を改めて認識させずにはおきません。

七

「中皇命」とその周辺が明確にされました。そこで彼女の自作に限って批評鑑賞にふれることにします。まず484歌から。

婦人空閨を嘆ず、その怨意隠然としてみる。……聊か理詰めな露骨な表現のやうであるが、それも鬱結した情熱の爆発で、その素朴さに却っていひ知らぬ迫真力がある。(金子氏評釈)

心情を吐露し、はばかりところがありません。怨むとはいっても、暗さは微塵もなく、媚態をさえ感じます。

誠に平明な歌で、かなり古調を帯びてみる。第二の巻頭の磐姫皇后の御歌を思ひ出させるものがある。(全釈)

他からも同じ指摘がされ、伝説的・民謡的な点もあげられます。しかし歌そのものは伝説的背景を必要としない平易さです。

平明率直で、何の粉飾もないが、真実そのものである点に、人を動かす力がある。女性らしいつつましさもよく、二句切れで引締ってをるのも、古趣がある。(佐々木氏評釈)

常識的なものであり、形は素朴な、従って重厚な趣をもったものであって、古風を持ったものである。(窪田氏評釈)

平明であること、二句切れである点、すべて10歌群と共通します。この一歌だけが古調ではないのです。

描写がないので、抽象的に叙し、迫力に欠ける所がある。古い調子の歌であるが、仁徳天皇の時代といふが如き古さは無い。歌から云っても、やはり孝徳天皇の時代と為るのが適当であらう。(全注釈)

落ちつくべきところへ来ています。問題を別な

ところに感じます。本歌といい、斉明歌(485—7歌)といい、母と妹に純情そのものの恋歌を歌わせた中大兄その人の魅力といったものです。それは次の10歌群についての謎でもなければなりません。

此の二首(11・12歌)は御年極めて若くあらせらるる御兄弟の飯事遊びの歌と思ふ。…其の調子も又温潤玉の如き感じがする。愛らしく罪のない面白い歌である。(左千夫新釈)

「飯事遊び」はひどい。が、笑えません。歌の真情をついています。

むつまじくも草を結びあふ皇兄妹の御姿が偲ばれて、感深い。(川田氏女流歌人)

親しい情愛をよく現してゐる。(全注釈)

明るくて、おほらかで、品位の高いもの

(窪田評釈)

明るい素朴な歌(佐々木氏評釈)

親しい細やかな心持の歌(土屋氏世界名詩選)

これらの評言も作歌の真をついています。その陰のもの、作歌の謎まできわめてはしません。

旅の行為や情景をさらとした表現に盛った、淡白なところに魅力のある、いかにも最盛期以前という匂いの著しい歌、温雅な風韻に拘すべきものがある。(田辺氏初期万葉) 最盛期以前とおっしゃる。これが最盛期です。あと30年もすれば人暦の登場する下降期です。

すべて甘えたような、我儘のやうな、情愛の籠ったこの口振りは、よほどの親密な間柄の人でなければいひ出せない。(金子氏評釈)

つくべきところを衝いています。そこになにがあるかは知らないで……。

無邪気なのは、宴会の歌だからと思っている。(山本氏文芸読本)

これはやぶにらみです。

或点から言えば余にはからいがなさ過ぎて飽気ない程のものである。幼稚で単純な歌ひぶりと思はれる程のものである。私の言ひたいのはそこであって、……実に白露の玉の如き純粋に輝いてゐる。よい味のある歌は万葉の女流歌人に於ける、或る人々の歌をおい

て全然求められない……。 (三笠書房短歌講座(3)今井氏評)

何といふやさしい純真に充ちてゐることであらうか。それはうら若い女性の美しい純情である。しかも高貴な女性の気品と香気をも、作品のうちに透浸させてゐるのである。

(伍藤氏詩精神と文化)

作者はお若い、そして旅先のくつろいだ気持で、一そう若やいで、まるで幼なごのやうな気分でをられたのではないかと思ふ。……単純で素朴で、しかもどこかにふっくらした芳香の漂ふ思ひがして、捨て難い。自分は、この香気は、法隆寺献納48体仏のなかの童女にも通ずるいくつかの仏像を思ふ。(創元社万葉集講座(1)石井氏評)

こまかい女性的な言ひやうで、これは注意して居れば、現代の少女からもきくことの出来る語気であるが、それには、既成概念からの言語を洗ひ去って、ひょいと不思議にいでる言語のうちにさういふのがあることがあるのである。(研究齋藤氏評) ⑨歌境、同文

素朴でしかも心のこまかな、優しく温くて、しかも品格のある歌である。最も上代風な風味をもった歌……。 (五味氏古代和歌)

年のころからいえば、10数歳の、——たとえるならば、新婚のあどけさが思い浮かびます。7歌の感触と同じですね。ところが、間人皇女は時に30歳に達しています。このギャップが問題です。まして、作者を齊明天皇とするならば、問題を懐かない方がどうかしています。天皇はそのとき60歳を越えていたのですから。さらに驚異が別にあります。孝徳天皇を難波に放置し、悶死させた当人たちが作者なのです。とても純真な心の持主とは思えません。情宜の風上にも置けません。⑩しかも、この異状なまでの純真さ、精神的な若さ、——実はこれこそが中大兄と母妹をつなぎとめた謎でなかったでしょうか？ それをひとり作品が語りかけてくるにとどまらず、齊明帝の死に臨んだ際の一語、「妾もわが妹と、炊女として造り奉らん、」——ここにも反響している気がしてなりません。

以上、諸評を引用しました。⑩時に10歌には省筆しました。別稿に詳述したからです。いずれに



せよ、10歌に初まる3歌は——484歌さえも、同じ心情につらぬかれています。この世の命のはかなさを10歌は知っているとはいえ、決してじめじめなどしていないのです。「いざ結びてな」——この柔かき、若々しさには媚態をおぼえます。それは品位を備えています。こうした筆者の感受を裏づけてくれる評語がまだ2、3のこっています。印象的なのは、それらの評語が作者不明の側から呈せられていることです。

若い女性の口吻で純真澄み透るほどな快いひびきを持ってゐる。(斎藤氏秀歌)

詞づかひも、心づかひも、実に素朴そのものの姿である。……稚拙にして子どもの口調に類して居り、それだけ純真な情が籠っているのである。万葉初期の代表歌として必ず逸すべからざる好作であらう。(赤彦鑑賞及び其批評)

うら若き御二人が、草を結び又は仮庵を作る真似事などやりつつ遊ぶさま、眼に見える様で、実に画の様な趣がある。其の調子も又温潤玉の如き感じがする。(左千夫新釈)

#### 註

- ① 7、8歌の作者については拙著省察(-)に譲ります。最近、松田好夫氏の万葉研究「作者と作品」を通読しました。賛同する点、賛同しがたい点、共に多かったのですが、間人皇女に連関して一言します。まず賛成なのは題詞を重んじ、左注を二次的、三次的なものとして解したのです。その結果、額田王は息を吹きかえました。沢瀉氏によって祭り上げられた斉明天皇の11首はそれぞれの作者のところへ返されました。それは間人老の二首(3、4歌)・額田王の二首(7、8歌)・中皇命の三首(10、11、12歌)・舒明天皇の四首(425、486、487、1511歌)です。
- ② 谷氏の論考は拓殖大学論集に採録され、後に単行本「額田王」になりました。
- ③ 吉永氏の所論は「間人皇女」(日本文学49)のち「文学と歴史のあいだ」に収録。直木孝次郎氏が全面的に賛しています。(中央公論社版日本の歴史(2))。
- ④ この立場にあるのは、考・攷証・古義・豊田氏新釈・川田氏女流歌人・吉永氏前掲書・中西氏比較文学的考察・直木氏前掲書・神田氏(万葉の世界・初期万葉の女王たち)。
- ⑤ 間人老が間人皇女の代作をしたと解したのは、——金子氏評釈・折口氏(新潮文庫万葉集研究)・武田氏

(総釈・新解)・旧版新講・奥里氏長歌全集・神田氏前掲書。

- ⑥ 学士院紀要所収「中皇命をめぐる諸問題」・「中皇命と有馬皇子(万葉4号)」。  
林吉博氏中皇命考・伊丹氏難訓考、同考。
- ⑦ 森脇氏解釈と鑑賞・沢瀉氏注釈等がこの見解を支持しています。
- ⑧ 神田氏は吉永氏の説をふまえています。実は安藤野雁こそ該説の祖です。二人とも野雁のノの字もありません。それでまかり通っています。学界はどうかしています。腐っているのです。
- ⑨ 同書の中に気になる評言が目にとまります。  
これら三首の方は、なにか混沌としていて……(五味保義氏評)  
12歌は一読しての印象は明快と云ふ訳にはいかぬ。(鹿兒島氏評)

大きく否といたい。限りなく平明清純なのです。次のようなとんだ失言がとび出すのも、この平明さ故なのです。

何か寓意あるに似たり。(山田氏講義11歌評)

- ⑩ 田辺氏は書紀を熟読し、そこから万葉を見直しました。中大兄は最低に評価される結果になりました。悪徳深い彼に秀歌などあるはずなどなかったのです。  
この評価を筆者は省察(-)で批判しました。同時に、西郷氏の一文を対比させました。その一箇所に限って再録します。

血に汚れた悪逆残忍な主君が、同時にこうした美しい作品(13歌)の作者であったという奇怪さのなかにこそ、道徳主義では汲みつくしえないこの時代固有の混沌が、そして天智の人間性ゆたかさや厳しさがあるのではないか。(私記)

記紀を読む時、初めから終わりまで、この奇怪さにつきまといわれます。それは現代人には理解しがたい混沌です。しかし彼らにとってはまことに明晰単純な原理であったのではないのでしょうか？ それはまさしく「道徳の彼岸」の世界だったと思われまます。

- ⑪ ここに引用した評言の内、10歌群を間人皇女作としたのは、佐藤・金子・土屋・川田の諸氏と、全釈の鴻巣氏です。倭姫としたのは、武田・石井の両氏でした。

作品の若さ・純真さから、その背後へメスを入れたものはありません。